

報告 染織史における東と西*

草 光 俊 雄**

はじめに

一昨年秋(1987年9月)、京都西陣織会館において産業技術史学会、社会経済史学会、そして英国のパソールド研究財団、ニーダム研究所の共催で染織史の国際比較に関する国際会議が行われた。本稿はその会議で発表された報告論文と討論の内容を紹介し、そこで議論された問題点と今後の研究の方向を探ろうとするものである。

まず本会議の参加メンバーについて簡単に述べておく。日本からは約30名そして英国、ニュージーランドから17名が参加した。そもそも染織産業の歴史に関する国際会議を開催すること自体わが国ではきわめて異色であったが、その上このように多数の参加を外国より迎えた例はそれ以前にはほとんど無く、画期的な催しであった。

会議は16日に川島織物、川村織物そして古代友禅苑訪問のエクスカージョンから始まり、現代に活動する日本の伝統的染織産業を見学し、そこで参加者たちとの親睦も深められた。その晩には開会のパーティが開かれ、正規の参加者の登録が行われた。翌17日からは三日間にわたる非常に中身の濃い研究発表

とそれにもとづく討論が行われた。

研究発表のタイトルとそのスケジュールを示しておく。

◎17日

議長：吉田光邦(京都大学)

発表：中岡哲郎(大阪市立大学)／宮島久雄(京都工芸繊維大学)／相川佳子(奈良女子大学)／芳井敬朗(花園大学)／西沢保(大阪市立大学)「西陣の染織史における東と西の出会い」

コメンテーター：ジュニファー・タン(ニューカッスル大学)

議長：マクシーン・バーグ(ウォーリック大学)

発表：斎藤修(一橋大学)／阿部武司(筑波大学、現大阪大学)「賃織から工場制へ——明治後期における綿織地帯」

コメンテーター：ダンカン・ビセル(ダラム大学)

発表：パット・ハドソン(リヴァプール大学)「ヨークシャー毛織物産業の産業組織と構造」

* 1989年2月24日受理

** 上智大学比較文化学部

コメンテーター：ジム・ヒギンズ（ウェリントン大学，ニュージーランド）

◎18日

議長：リンダ・グロウヴ（上智大学）

発表：内田星美（東京経済大学）「小幅縞木綿とその代替大衆衣料——幕末～大正初期の服装史・技術史・工業史の忘れられた接点」

コメンテーター：デイヴィッド・ジュレミ（マンチェスター・ポリテクニク）

議長：清川雪彦（一橋大学）

発表：ダグラス・ファーニー（マンチェスター大学）／米川伸一（一橋大学）「世界の木綿紡績産業における大企業の出現，1883—1938」

コメンテーター：加藤幸三郎（専修大学）

発表：ジョナサン・ザイトリン（ロンドン大学，パークベック・コレッジ）「変貌する服飾産業——国際的趨勢と英国の反応」

コメンテーター：ジョン・スタイルズ（ブリストル大学）

◎19日

議長：ネジュリ・ハート（ロンドン大学，ユニヴァーシティ・コレッジ）

発表：デイヴィッド・ジェンキンス（ヨーク大学）「日本市場の開放にたいするヨーロッパ毛織物生産者たちの対応」

コメンテーター：トニー・ハウ（ロンドン大学，LSE）

発表：杉山信也（慶応義塾大学）「東アジアにおけるテクスタイル・マーケティング」

コメンテーター：リチャード・ウイルスン（イースト・アングリア大学）

議長：ジョン・バット（ストラスクライド大学）

発表：スタンリー・チャップマン（ノッティンガム大学）「19世紀極東における英国商会」

コメンテーター：杉原薫（ロンドン大学，SOAS）

総括討論 議長：ネジュリ・ハート

各報告の概要

まず中岡教授らの報告からみていくことにする。この報告は染織の東西交渉史という本会議全体への序章の意味を持っていた。宮島教授による多くのスライドによる文様の東西交渉の説明も行われて興味深かった。

本稿の問題提起は、工業化後発国が西欧技術との出会いの中でどのような仕方で技術移転を行っていったかを、京都のテクスタイル産業の研究をとうして見ていこうとするものである。西陣織と京友禅染は日本を代表するテクスタイルであるが、特に明治以降の日本の工業化の進展のなかで他のテクスタイル産業とは異質な発達をみた。絹製糸、木綿紡績、木綿織物は一般的にいて西欧の機械技術を急速に取り入れその伝統的な特徴を捨象していったが、京都のテクスタイルはその対応において異なった特徴がみられる。それは京都では西欧の技術を熱心に取り入れたことは取り入れたが、京都の伝統的な特徴を捨てることなくむしろその伝統性を積極的に主張することによって新たな展開を行っていったということである。

京都の繊維産業は古代から宮廷との深い繋がりをもち、特に空引き機を使った高級な奢侈品生産を独占していた。それも武士階級の登場とともに、宮廷の独占は崩れ一部に私的な経営が成長し、宮廷のみならず神社寺院そして上流階級の需要に応じて発展していった。しかし16世紀後半に起こった応仁の乱に

より、京都は戦場と化し織物職人たちは堺へと移住した。堺は当時中立の貿易港として繁栄しており、そこを通じて生糸の輸入もおこなわれていた。また明やポルトガルやスペインからの物産や文化も入ってきていた。織物職人たちはとくに明からの新しい織物技術をそこで習得することになり、彼等が内乱後京都へ戻ったのち大きくこの産業を発展させる基盤となった。彼等は現在の西陣の地に居を定め、以後ここから西陣織が産みだされていくことになる。

江戸時代に入り、京都、大坂、江戸といった大都市ばかりでなく、地方にも都市が発達し、経済化が進むと、京都の織物産業はますます増大する奢侈品の需要に応えるべく生産を拡大し、日本における一大生産地となっていた。明から導入した技術はそれまでの単色の織りから様々な色を横糸によって織り込む方法を西陣に与え、金糸銀糸なども入った豪華な製品が生産されるようになった。また伝統的な絹機によっても比較的単純な文様の生地や平織の製品が作られたが、西陣の主力はあくまで空引き機による高級品であった。その複雑な技能を必要とする高級織物産業は次第に労働の専門化を発展させ、18世紀半ばに空引き機の株仲間ができると更に多種多様の株仲間が出現した。しかしながら株仲間による製品管理や品質規制などが行われて西陣織物の独占が強化されようとした丁度その頃、西陣織産業の不振が始まった。株仲間による努力にもかかわらず技術が流出し始めたのである。桐生などを代表とする地方の田舎絹が西陣にたいする競争力をもちだした。それは単に市場を奪われたということだけではなく、生糸の西陣への供給が減少することをも意味していた。この打撃に追い討ちをかけたのが財政困難に陥り始めた幕府や諸藩による高級な消費財にたいする攻撃であった。水野忠邦による天保改革とくに奢侈禁止令(1841)が与えた影響は大きかった。続けて日本の開

国は生糸の流出を大量に促し価格の高騰をもたらした。西陣は大きな打撃を被ったが、職人たちは新しい技術の開発に努力し、絹に代替するものとして木綿を用いた製品や新種の製品を起こそうとした。こうして西陣は明治を迎えることになる。

明治維新は京都の織物産業を更に不振に陥れた。東京への遷都は西陣織が依存していた宮廷の人々の移動を意味していたし、新政府による制服の洋式化のために西陣は明治の半ばまで不況にあえぐことになる。しかしながら京都人たちはこうした状況を黙って見てはいなかった。京都府は府内の産業振興政策を打ち出し、皇室と政府からの財政的援助を受けてその実行に乗り出した。京都の染織産業はこの中で立ち直りの契機を掴む準備を行ったのである。多様な産業振興政策のうち、まず第一に重要な政策は従来の株仲間を廃止して西陣物産引立会社を設立したことである。これはひとつには封建的な産業構造を解体して近代的な合弁会社のようなものを作ろうとしたものである。問屋制家内工業や生糸の供給を支配していた商人たちを排除し、織工を再編し、原料と製品の売買を管理しようとしたものであったが、結果的には雇用構造などにはあまり大きな変化はなく、むしろ経営者たちの団体という体をなしていた。第二に重要な政策は養蚕から製糸にいたる原料の生産を確保しようとしたことである。これは原料から最終製品までの一貫した体制を作り出そうとしたものである。しかしこの政策は日本全体の産業の展開によって具体的になることはなかった。第三に今回の会議のテーマからみて最も重要な点は、振興政策の重点が技術の移転と普及へと除々に変わっていったことである。何人もの者がジャカード織りの技術を習得するためにヨーロッパへ派遣された。ジャカード織機についてはサミュエル・スマイルズの「西国立志伝」が早くから翻訳されており、発明家のジャカードもその中に描か

れていたことが関係があるかもしれないが、おそらく府の御雇い外国人でフランス人のレオン・デュリによる情報も大きかった。ヨーロッパへ渡った職人たちの苦勞は大きかったが、技術の習得がすでに高い技能を持っていた職人たちによって導入されたことは意味深かった。彼等はまた日本と西洋とのギャップを技術者として実感することも可能であった。織物技術だけでなく染色技術の導入にも熱心で、共に外国から帰朝した職人たちは他県の職人たちをも含めた技術指導を行い普及に努めた。京都から派遣された技術者たちは単に生産技術を学ぶ目的ばかりではなく、美術やデザイン習得を目指す者もいたことは注目し得る。

明治前半の西陣の織物産業の盛衰は全国的なそれと呼応するが、それは一地方産業も日本全体が経験した政治的経済的な移行とは決して無縁ではいらなかったからである。この期間は四つに分けて考えることができる。第一期は維新から1875年までで、産業全体が政治的社会的に安定を欠いたことによる影響を色濃くうけている。特に伝統的な奢侈品は大きな打撃をうけた。第二の時期は1880年までの好況期である。社会的安定が達成され、封建的な拘束から開放された実業が活発になりインフレーションによる富裕感が強まった。第三期は松方デフレによる財政縮少によって引き起こされた不況の時期である。1885年に底に落ち込み、それ以降第四期の飛躍的な成長に入る。

先に見た京都府の産業振興政策はこうした西陣業界の経験した変動にいかなる効果をもたらしたのか。第一期に対応するのが西陣物産引立会社の設立であったが、これは上にも見たように失敗に終わった。宮廷相手の取引を独占し西陣の超有力者であった御寮織物司を務めていた五つの家が会社に加わることを拒否した。また参加した人々も何をしてよいか分からなかったのが実情であった。貧窮

した織工の救済などを図ったが、それも失敗した。第二期の時代には西陣はそれまでの不況を取り戻すために積極的な活動を始めるが、それは時には府の方針と相容れない場合もあった。この間の問題は低品質製品の過剰生産の問題であった。品質の低下は、おもに西欧技術の導入と関連がある。一つは木綿の縦糸を用いて絹に近い製品を生産し、これを本絹として販売し信用を失っていったことであり、また輸入染料の使用による染めの品質低下であった。輸入染料は最初は色が鮮やかでしかも低価でできたが、水に浸けるとすぐ色おちしてしまった。これらは染色技術が未だ発展途上にあったためでもあるが、染色人たちが必要な化学的な知識を持っていなかったことにもあった。こうした状況をみて京都府は新たに西陣織物会所を設立し問屋制度を再導入し、また品質管理を強化させようと試みた。しかし自発的な品質管理は現実的ではなく成功しなかった。西陣の大衆向け商品への転化をそのまま織物業者たちの倫理的墮落と捉えることはおそらく誤りであり、むしろその背後にあった、技術者たちの積極的な技術開発への意欲が、たまたま負のかたちで出たと考えるほうがよい。しかし西陣はこの時点で大衆商品を目指すのか、それとも伝統的な高級品の生産にあくまでも固執するのか、という選択を迫られていたのであり、京都府はまさに後者の立場に立って西洋の技術をさらに活用しうる方策を模索していたのであった。

1881年から始まった不況は西陣にも打撃を与え、産出高は急速に減少し返品が築かれた。しかし織物工たちはこの中でかえって自覚を高め、劣悪な製品を規制し、より品質の高い製品を生み出す技術を求める努力を行った。彼等は西陣物産会所をさらに改変し西陣織物工業組合を設立させた。これは生産者たちによる自己規制にもとづいた生産管理と生産者同志の相互扶助を目指したものであ

り、それ以前の組織よりも数段進んだものであった。彼等の技術改良への情熱は国産ジャカード織機と染色技術の開発にみられる。また飛び杼の全国的な普及は京都の指導のもとに行われたのであった。

1886年からの日本経済の復活とともに京都の染織産業も上向きになったが、それを一番よく示しているのがジャカードの普及であった。ジャカードは従来支配的であった空引き機を凌駕し複雑な文様織りの主流になった。ジャカードは今まで以上に複雑な文様を織ることを可能にした。ジャカード織りのために必要な分業が徹底するのに長い時間が費やされたが、西陣はいまや多様な文様を織り込んだ製品を主力として市場に出ていく道を見出した。このために京都はデザイナーや絵師の養成にも力を入れることになった。デッサンの習得のための教室が設けられ、それは後に京都市立美術学校に発展していったし、また従来専門の絵師を欠いていた染織産業は、たとえば陶磁器産業から絵師たちを引き抜いてきた。そうした中で西陣織や友禅染に図案を供給する図案家(デザイナー)や日本画の画家たちが輩出するようになり京都の染織産業は芸術的絵画的な作品を多く生産するようになっていった。

京都におけるデザインの分野での西洋との出会いは京都の伝統的な絵画工芸、とくに琳派との関連で、東京などの他の地域と大きく異なっていた。例えばアール・ヌヴォーなどにたいして京都の工芸家たちはそれが琳派の再輸入であり何等新しいものではないとして有難がることはなかった。またそれとならび、新しいタイプの製品のマーケティングが発達し、神戸にあった呉服問屋高島屋などは自ら新しい百貨店へと成長する過程で、西陣の高級品を大量に上流階級へ販売しはじめた。これが西陣や京友禅の高級化をさらにすすめたのであった。

さて、こうして京都における染織産業の展

開を見てきたが、大きな特徴の一つは京都の染織産業は一貫して家内制生産であり、とくに出機を中心とした問屋制家内工業であったということである。この近代以前からの特徴はジャカードを典型とする西欧技術の導入によっても変えられることなく、むしろその性格を強めたのであった。そして京都の染織業は小規模経営による高級製品の生産という道を選択し、新しい技術を導入しながらも伝統的な生産形態を保ち、またデザインにおいても伝統的な文様を重んじながら発展していくことになるのであった。

こうした中岡氏らの報告にたいしてジェニファー・タン女史のコメントは大きく分けて二つの点に関するものであった。第一に労働編成に関して、第二には技術に関するものである。一については特に家族の役割が西陣ではどうなっていたのか。英国の場合、テキスタイル産業は農村工業と都市の工業とに分化し、農村では農業を補足する形で織物や編み物が行われたと考えられてきたが、最近の研究ではこの二重経済のモデルが再検討され、家族の労働を一つの単位として家計を構成するものであると見る見方が一般的になってきている。こう見ると都市と農村の労働の編成にはそんなにはっきりとした区別をすることは難しくなる。一体京都の絹染織産業において、家族労働はどの程度重要な役割をはたしたのか、また英国の場合経済単位としての家族は工場制への移行に重要な意味を持ったが、京都にもそうしたことが言えるのかどうか。この点についての解答はなされなかったが、西陣においてみられた株仲間の成立について、農村への織物産業の流出を結果したのかそれとも流出を阻止するために株仲間が形成されたのかという質問があり、それに対しては西陣の株仲間は特に桐生への技術流出を阻止しようとして成立したものであることが指摘された。桐生は江戸という最大の市場に

近接しており、また生糸生産地にも近かったため京都の織物業にとって最もごわい競争相手になりえたので、西陣としても自らの産業を保護せざるをえなかったのである。

タンはまたなぜ西陣の中小製造業者たちが高島屋のように小売販売業へと改組しなかったかという質問をしたが、製造と販売との分業が確立しており、販売をおこなっていた呉服屋の店はデパートへの転身を図ったものもあったが、製造業の場合プッティング・アウト制度が発展しており大規模化は産業の特性に見合っていなかった、という解答がなされた。技術移転に関しては、技術そのものの移入は多くの場合失敗するが、輸入国の事情に合わせた移転は多くの場合成功することがしばしばであり、京都がおこなった努力には国内での技術普及のほかにとどのようなものがあったのかという質問があった。これにたいしてはとくにジャカードの場合木製のジャカードが作られその安価さのために普及が早められたことが指摘された。

他にフロアから、ジャカードの普及がそれにもかかわらず遅れたのは技術的なものであったのか、それともジャカードで織られた製品を受け入れる市場があまり十分ではなかったからなのか、というものがあつた。それについて中岡氏は、ジャカードそのものの操作の技術はそんなに難解ではないが、その周辺の技術過程が整備されなければ（例えば紋孔過程）生産は軌道には乗り得なかった、と答えた。ジャカードがもたらした新しい特徴として空引機と異なるのは、ファッションにたいして敏感に反応できたことではなかったかという指摘もされた。それにはたいしては、大量生産向けというよりも西陣の場合には、帯という高価だがあまり同じデザインの品物が多くても5本以上は作られない製品の生産に丁度おあつらえ向きであったがために、採用されることとなったのである。また西陣の将来に関して、アジアの国々での下請け的な

ものが増加するようになるのかといったきわめて現代的な質問も出されて興味深い議論が行われた。

午後のセッションはプロト工業化をめぐるのマイクロな研究の日英の比較が行われた。司会のマクシーン・バーグ、そして斎藤修、阿部武司、パット・ハドソンらはこの分野で多くの発言をしている国際的にも有数の論客である。

斎藤と阿部の報告は大阪府泉南地区の綿織物産業のケーススタディで、賃機から工場制への移行の条件を考察している。日本の経済発展の二重構造を形成した一方の産業は農村工業であり、その機械化をめぐる問題は日本経済史における重要なものの一つであった。大規模な工業発展とともに、農村工業も明治以来の日本の工業化に無視できない大きな役割を果たしてきたのである。在来織物産業の多くは賃機、或いは問屋制家内工業が支配的であり、この生産形態が力織機の導入とともに変化してきたのがその工業化の過程であるが、しかしそれはさまざまな条件によって異なっていた。泉南地区は在来織物産業のなかでもいち早く力織機の導入に成功した地域のひとつであり、それはまた同時に経営形態にも短期間に大きな変化が伴っていたことでも特徴的であった。

第一次大戦以前の日本の綿織物産業は大規模な紡績兼営織布と小規模な在来綿布生産者との二つに分かれていた。前者は輸出用と国内の洋服への需要のための広幅綿布を生産し、後者は主に伝統的な着物のための小幅綿布を生産し、その市場におけるシェアは前者にくらべてはるかに大きかった。これらは比較的狭い地域に結集し、いわゆる産地を形成し独自の生産物をかかえた地場産業として成立していた。そこでは問屋制家内工業が一般的であったが、泉南の場合、農村家内生産が主力で、問屋制の介入はまだ見られなかつ

た。しかし急速に問屋の出現が顕著になり1880年代の半ばまで綿布生産に従事していた農民は3分の1にすぎなかったのが、1890年代の初めまでに80%の農家が問屋たちの賃機仕事をを行うようになった。

ヨーロッパのプロト工業化との大きな相違は、泉南の場合問屋たちは地元の人々で都市の織元ではなかったという点である。これは泉南だけの特徴というより日本の問屋制家内工業の特徴でもあった。ところでこうした地場産業を形成していた産地間ではその製品の多様性にもかかわらずきびしい競争が行われていたことがもう一つの特徴であった。明治の前期に輸入綿製品が全国的に販売された時に綿製品の産地の中には競争に敗れて姿を消していったところもあり、またスランプに陥ったところも多かった。しかし不況から立ち直った産地や新たに出現した地域では、国産の低品質の手紡の綿糸から低価格で規格化され機械製の糸に移行することによって競争に打ち勝っていった。泉南地域はまさにその典型であった。こうした熾烈な生存競争は1920年代の不況時にも見られた。力織機の導入がまだされていなかった産地では大きく生産が立ち遅れ、市場でのシェアは81%から63%へとおちこんだ。この危機を乗り越えるために有利な条件が存在した。安価で操作が簡便な電力によって稼働できる力織機がでまわりはじめたのである。これら力織機は工場ではなく賃機織工たちの作業場に家内工業の形態を残したまま導入されたりもした。第一次大戦以前にはこうしたことは見られなかった。泉南などの織物産地へ導入された力織機は蒸気や石油などを使用していたために、むしろ工場制度への移行が見られたのである。

理論的には問屋制家内工業から工場制への移行は二つの側面もっている。一つは生産形態での変化で、生産の集中化が行われる。もう一つの面は手工業から機械への移行である。プロト工業化の研究が示しているように

これらはかならずしも共時的におこるとは限らない。しかし泉南などでみられた第一次の機械化は同時に工場制の成立をももたらした。それは一体どのような条件のもとでそうなるのであろうか。

1910年代の力織機導入の条件としては次の二つの理由が考えられている。ひとつには綿糸・綿布価格のシェーレである。先行してカルテル化された紡績産業と産地綿布業との間の格差がその価格差となって発生した。そこで産地の問屋や織元たちの間での利潤が減少したことである。第二に織工たちの賃金上昇が考えられる。たしかに泉南の場合を1910年前の十数年間にわたって見てみると綿布と綿糸との間にはシェーレが存在する。綿糸は上昇傾向にあるが綿布の価格は横ばいである。ところが同じ期間の賃金を見てみると一方で農業労働の季節変動が賃機工賃に影響を与えていることが分かると同時に、賃金上昇趨勢が見られないのが大きな特徴である。このことから農家の織元に対する地位の低さ、なかんずく織元の賃金決定における圧倒的な優位を見てとることが可能である。それでは工賃は力織機導入にはまったく無関係であったのであろうか。

資料をもう少し詳しく調べていくと実際はもっと複雑な実態を呈していたことがわかる。たとえば泉南には「機場の我儘」が存在していた。これは賃機農民のかんりの者たちが横流しや横領をきめこんでいたため織元たちがその対策に苦勞したという事例や、複数の織元と関係をもって高い工賃を要求したりするという例が頻繁に見られた。そこで工賃のデータを織工たち間での賃金分布として集計し直してみると、1900年代の後半には賃金格差が広がり高い工賃を受け取っていた織工のほうが低賃金の織工の数を上回っていたことがわかる。それではこの高賃金を受けていた織工たちとは一体誰だったのであろうか。明治後半の織工たちはだいたい一日3反

織ったと考えられるが、「我儘な織工」たち（その大部分は帯谷商店へ反物を出していた）は4分の1半期に200反以上納入することができた。普通の織工たちが農業と兼業であったことからこの高い工賃を得ていた織工は、家族の手を使っていたかもしれないが、家族以外の働き手を雇っていたことが充分考えられる。このような賃機の請負人たちが織元たちに高い報酬を要求しはじめたのではないかと思われる。

こうした背景をもとに織元たちはさらに低い工賃でも働く賃機農民を見付けだすかあるいは労働節約的な力織機を導入するかのどちらかを選択したのであるが、大部分の泉南の織元は後者を選び工場化のスピードは著しく急速であった。前者の場合は低品質の商品の生産と密接に結びついていたようである。今回のケーススタディに用いられた資料は主に帯谷商店のものであったが、この問屋は最初前者の道を取り1900年代の後半に遅れ馳せながら力織機を導入した。問屋がこうした工場主になる場合もあるが彼等はまた問屋制の性格をも同時に残していたようである。というのは他の工場主の製品を商うことも一般的であったからである。こうしてみると泉南の場合日本のプロト工業化はヨーロッパとは異なった様相を呈していることが分かる（なお斎藤・阿部報告は南亮進・清川雪彦編『日本の工業化と技術発展』、東洋経済新報社1987年刊に収録されている）。

バット・ハドソンの報告も英国のプロト工業化の問題を扱ったもので、斎藤・阿部論文とはまた異なった角度から工場制に至るさまざまな道を論じている。ハドソンは数年前に *The Genesis of Industrial Capital: A Study of the West Riding Wool Textile Industry c. 1750-1850* (Cambridge University Press, 1986) という優れた研究書を出し、毛織物史研究に画期的な貢献をなした若手の研

究者で、ヨークシャーの毛織物資料に精通していることにかけてはおそらく第一人者の一人である。ハドソンの報告はヨークシャーの毛織物産業の工業化、なかでも工場制の確立が何故ゆっくりとしたものであったのかを工場制以前の産業構造や伝統的な文化との関連から説明しようとするもので、そうした古い枠組みが壊れていく過程を主として信用制度の変遷から見ていくのである。その際マイクロな分析が採用される。ひとつにはプロト工業化における産業構造は土地所有の相違によって大きな影響を受けているのであり、この所有形態そのものはるか以前からその地方に固有のものだからである。このような地域の特質をより鮮明に見ていくためにふたつの小さな町ソワービ(Sowerby)とカルヴァリ(Calverley)が比較される。

18世紀を通じてヨークシャーのウェスト・ライディングは低品質から中級の品質のウルンとウステッド毛織物製品の生産で知られていた。ウェスト・ライディングをもっと詳しく見るとその中でも二つのタイプの地域に大きく分けられることが分かる。ウルンの場合、独立の織工による生産が基本であり、織工たちは材料を前借りし生産物を定期的なクロス・ホールの週市場で販売した。かれらの多くは織物を農業との兼業でおこなっていた。この一帯は耕地としても放牧地としても豊かで早くから大土地所有の対象となってきた。こうした制度的構造が土地市場、相統権、さらには社会構造に大きな影響を与え、また職人的な産業形態の存続をも促し続けたのであった。北西部を占めるウステッド地帯はこれに反し問屋制家内生産が支配的であった。家計内の分業が盛んに行われ紡績部門は広範囲にプットアウトされた。織工たちは次第に問屋・織元たちに依存するようになり貧窮化していった。この一帯は農業経営にはあまり魅力的ではなく、土地経営は投機的な意図をもつ大土地所有者の手によって行われ、

彼等と多数の貧困化した土地を持たない織工とが共存していた。このような社会構造は問屋制家内工業が成立するのにふさわしい条件をなしていると考えられる。ソウァビ、カルヴァリはそれぞれ二地域の代表的な町として選ばれている。

伝統的な社会構造に深く規定されていた毛織物産業ではあるが18世紀の末までに除々に変化が見られるようになった。ウルン部門では毛ばだてと粗梳き過程が機械化され、すでに水力によって行われていた縮絨過程と共に同じ水車工場で行われるようになった。以前は地主によって所有され経営されていた水車は織工たちのグループが資金をだしあって所有されるようになった。こうした変化は必ずしも工場制への移行を意味した訳ではなく伝統的な独立した織工たちによる体制はそれによってむしろ強められていった。商人たちが自ら生産者となってマニュファクトリによる集中的な生産に乗り出すようになると、自分たちの経営に影響があると考えた織工たちはそれに対立するようになるが、それでも全体的には伝統的な生産形態が主力であった。

ウステッド部門の場合ウルンに較べて集中化が紡績部門の機械化が広がる1820年代まで遅れた。問屋制家内工業が規模としても成長し広範囲に散らばった下請けによる賃機や紡績工の存在がみられた。生産の集中化が遅れたのは必ずしも技術的な問題ではなかった。木綿産業における新技術からの導入は比較的簡単な筈であった。むしろナポレオン戦争とその後の不況とふんだんに供給される低廉な女性労働力の存在、更に信用基盤の在り方が家内生産存続の大きな理由であったと思われる。特に信用の問題は重要であった。これまでの産業革命の研究が固定資本形成における信用について重要視してきてはいるが、より問題だったのはむしろ流動資本の確保であって、固定資本の三倍以上を必要としていたからである。

1820年代後半から30年代までは産業の供給サイドにおける信用は中小の企業家が新しく仕事を始めるには不利になっていた。銀行からの融資を受けることもあまりできなかった。一方需要サイド(製品の販売)では幾つかの変遷があった。クロス・ホールを媒介しての現金決算または短期信用は12か月から24か月の非常に長い信用期間に変わった。しかしこれも1825年頃から短期信用に変わっていった。そして1830年代から40年代になると新しく登場してきた、大企業ではなく中小の企業家たちを対象にした銀行によって企業家たちの生産と販売面での資金繰りは容易になり、経営も軌道にのりやすくなった。

企業家が信用前貸しを受けることができるかどうかは社会的な背景と同時に文化的な背景も影響を及ぼしていた。企業家が事業を始めるにあたり、また事業を成功裏に進めるにあたって単に国民経済的レベルでの信用貸付の有利不利の条件のみならず、地域的な条件も大きく作用したのであった。ハドソンはこうしたさまざまな地域における特性を分析しウルンとウステッド部門における工業化の過程が大きく異なっていたこと、そして似たような条件にありながら必ずしも工場制がスムーズに定着しなかった原因を解明している。

ダンカン・ビセルの斎藤・阿部報告へのコメントは手機から力織機への移行の日英の国際比較に関するものであった。力織機への移行は一国内における一産業においてさえ地域や部門などによってそのタイミングが異なっているのが普通であるが、力織機採用の時期や条件などについて一般的な説明が可能かどうかを問うことは重要であるし、また何故ある企業は伝統的な技術に留まったのかにも注目することが必要であると指摘したうえで、1900年から30年の期間における日本の木綿産業との比較における興味深い点を幾つか示唆

している。泉南におけるようにランカシャーにおいても大量の女性労働を含めた賃機による農村工業が一般的であった。他からの競争に直面した時に企業家が採り得た行動は、織賃を押さえることが最善の方策であり、その為には手機を用いて賃機を維持しながら低質な製品の生産に変えるか、それとも力織機を導入するかのどちらかであった。帯谷の場合と同様にランカシャー農村工業は低賃金労働力が豊富であったので力織機の採用はすぐには起こらなかった。第一次大戦の好況時に賃機を増加させたことは納得できるし英国の例も短期的な見通しの中で同様のことが行われた。しかし長期的な判断から都市の産業家たちが力織機を導入したという例もみられた。

こうした日英間の類似とともにまた相違点も指摘されねばならない。ランカシャーの織元たちは1820—50年の間国内市場において外国産の製品との競争や紡績業者のカルテルによってつけあげられた綿糸の価格によって彼等の経営戦略が影響を受けたことはなかった。ランカシャーでは織機の貸与はあまり行われなかった。また横領などは頻りに問題になったが「機場の我儘」といったケースはなかった。それぞれの産地内における力織機の導入はランカシャーと比較すると短期間に起こったようだが、そこにおける地域の同業組織の役割はランカシャーには見られないものであった。これらの相違点の指摘のうえに次の質問が寄せられた。都市の商人たちと農村の商人たちとの行為にどのような違いがあったのか、都市と農村を繋ぐ経済的なリンクは何であったのか。力織機工場の建設資金の調達に困難はなかったのか。そして手織り工の間でランカシャーの一部に見られたような共同で工場を建設する試みはなかったのか。女性労働の割合は。伝統的な織工の機械化にたいする文化的社会的な抵抗は。

ジム・ヒギンズのコメントはいささか抽象的な理論的整理だったのでここでは割愛する

ことにして、討論の紹介に入る。阿部・斎藤のビセルへの解答は、都市と農村の商人に関しては都市には集産地問屋があり全国に製品を流通させていたし、農村には産地問屋がいて賃機を組織していたが、両者の間には従属関係があったわけではなかった。また力織機工場の建設は1910年ころにはまだ安価であり、外部資金を借り入れる必要はあまりなかった。また株式会社は例が少なかった。また家族経済については女性の比率は英国に比べると高く、家族労働もヨーロッパのようにシーズンに組織されていたというよりも家長は農業専業で副収入の稼ぎ手は主として女性子供であった。その意味では農村の賃機はアルティザン的な職人ではなかった。

討論は主に信用の問題、賃機から工場制への移行の過程に関するもの、そして生産過程におけるよりも製品の改良発展の問題に集中した感があった。信用に関しては、倒産と再生の研究の重要性が指摘されたが、ヨークシャーの場合は倒産しても比較的資金の前借りが容易であったのですぐにまた新しく業務を再開することができたことが指摘された。また資本形成については外部資本の存在に注意が向けられ、とくにブラッドフォードのドイツ商人たちが毛織物産業へ資金融資を大量に行ったことが指摘された。移行の問題では、賃機から工場という図式は両者のモデルの相違がかならずしも明確でないことがおもうにしておき、また下請け制度の継続性などもかんがみると単純な移行論では事実をありのままに捉えることができないのではないかという疑問もだされた。泉南の場合でも工場が賃機のように問屋制度によって下請け化されるといった事例が報告者によって指摘された。製品改良の問題はファッションや需要の側からの産業界へのインパクトと考えることもでき、価格競争だけから技術革新の問題を論ずると一面的になりやすく、製品の品質、デザインなどの変化をも視野にいれた分析の

必要性が強調された。

18日は内田星美教授のファッション史、技術史、経済史を総合的に捉えようという野心的な報告から始まった。高級なぜいたく品に関するファッションの歴史はあるかもしれないが内田教授は庶民の衣服であるところの縞木綿に注目する。江戸後期から明治にかけて3000万人近くいた一般の人々が常用していたのはまさに縞木綿の着物であった。この着物が西欧化の波のなかでどのような変化をとげていったのかはまさに日本の繊維産業の歴史にとっても大きな問題を提示するのである。これまで比較的光をあてられることが少なかった研究であり有益な報告であった。

小幅縞木綿は江戸初期にその起源がある。小幅の着物生地という標準化された単位もそのころ確立した。また反物の裁断の標準化もその後すぐに起こり、日本の衣服産業にとって画期的なことで、日本建築における畳という標準化と並んで西欧化以前の日本人の社会生活の基盤をなしていたといっても過言ではない。木綿の着物には先染めといって糸を先に染めておいてから織り上げる方法と、白糸で織ってから後で染める後染めの方法があり、前者の中には「しぼり」のように手のこんだものもある。先染め縞木綿や後染め（浴衣など）は庶民に初めて色を着るよろこびを与えた。そしてこれらの生産はプディング・アウト制が支配的で織元たちはデザインの面でも指導力を発揮しなければならなかったし、専門の染色業を必要とした。染料は藍、紅、桜色、黄、黒、茶などの色が用いられた。特に藍、紅、桜色は江戸時代の終わりまでに商品化が進んだが、その多くは縞木綿に使用されたと考えられる。

着物の需要は明治に入っても減ることはなかった。農村においては1930年に至るまで人人は着物を着るのが一般的であった。かろうじて児童のよそゆきに着物と洋服の両方が着

られたくらいである。都市においても明治の初めは圧倒的に着物が着られ、1900年に男性や子供たちがフォーマルなものとして洋服を着用するものもあらわれたが、普段着には着物を着るのが普通であった。そして1930年によく洋服と着物の比率が逆転したのである。このことは輸入綿布は日本の市場においては当初はあまり成功しなかったことを意味する。少なくとも小幅縞木綿の市場には全く影響がなかった。むしろ着物の裏地として絹と競合したと考えられるが、これも無地の木綿生地生産者が洋糸を用いて生産を開始するようになると輸入綿布は日本の市場から撤退せざるをえなくなった。

しかしこのことは伝統的な縞木綿の生産者たちが西洋のものを全く取り入れなかったということの意味してはいない。彼等はむしろ生産費の低減のために積極的に洋糸や国産の機械紡績による糸を使用したり、また西洋の染料を導入した。外国の原料をあまりにも早急に導入しようとしたため、また取り扱いについての無知にも起因して後者の場合幾多の失敗もあったが、生産者たちは一般的により安い材料や原料にたいして積極的であった。失敗の経験からは技術教育のための学校を産地に設立するなど進歩的な態度を示したのである。織り部門における力織機の導入は紡績部門に較べて遅れたがそれは小幅の生地を織るのには経済性の点であまり影響が大きかったというわけでは必ずしもなかったからである。国産の小幅縞木綿用の力織機生産の努力は勿論おこなわれた。しかし縞木綿の市場がさまざまなパターンを要求したので規模の経済性はあまり重要ではなかった。

縞木綿の需要は19世紀末まで増加したがそれ以後減少し民衆の衣服における中心ではなくなる。それは従来の着物文化の枠内で、輸入された技術を応用した新しい製品が出てきたためであった。綿ネルのプリント、メリンス、銘仙やそれに似た絹製品などが価格の点

でも縞木綿と競合するようになった。こうした新しい製品の生産は、共に生産性の高い西洋の技術を使用してはいたが、日本の特殊な市場に向けて行われた。そしてその展開は従来の縞木綿産地が自らを変容させていった過程でもあった。

内田氏の報告に対するディヴィッド・ジェレミのコメントは大きく3点にわたっていた。第一に着物生地と西洋の生地との規格の違いが英国の木綿製造業者にとっては異例のことに思われたであろうということである。英国では長い間規格の統一が行われなかったが、日本の場合は早くから規格の統一がはかられており、このことが機械化の促進を早めた原因のひとつでありえたのではないか。またこのことが木綿糸の規格化にも貢献したのではないか。第二に機械化の導入によっても着物への需要は長いこと減らなかつたが、着物のファッションはどのようにして生まれたのか。それはヨーロッパのように毎年あったのか。農村では着物の需要が長かつたが、その低落化は農村人口と都市人口とのバランスの逆転によるものなのか。着物の縞はなぜ縦糸で織られているのか。横糸で織られることはなかつたのか。第三に、新しい原料が入ってきたときにそれがどのように製造費に影響をあたえたか。たとえば染料。なぜ西洋の着物生地が入ってこなかつたのか。

これらの質問にたいしては、綿糸の規格化(番手)はたしかに江戸時代からあるが、必ずしも着物の反物の規格化からきたわけではない。反物の規格化はむしろ寸法に関するものであるのにたいし、綿糸の場合は品質に関

するものだからである。縞の織り方については縦糸で織る方が単純で仕事の能率が高かつたので、横糸を中心とした織りは、たとえば沖縄などで見られるが、例外的であった。勿論、格子の場合は縦糸と横糸で模様は織られ、また西洋から日本の着物向けの生地が入らなかつたのは、おそらく日本よりも中国市場のほうが重要であった為と考えられる、ということであった。

この後の討論は、まずセイラ・レヴィットが実際に洋服などの再生や製作にかかわっている者の立場から、日英の裁断や仕立ての相違について面白い指摘があつた。特にベッドガウンという昼のジャケットが日本の着物の裁断と殆ど同じで、17世紀頃モンゴルのドレスが上流社会に流行したものであるという話には皆驚いていた。その他、日本の規格化は中国からの輸入ではないかという意見や、アジアにおける木綿文化の広がりやを考慮に入れる必要性などの指摘が中岡からだされた。ザイトリンは市場、技術、労働組織というそれまで議論が集中していた問題のなかから、特に生産過程における改良と同様に製品そのものの改善、革新が果たす役割の大きさを再び提起した。この点については例えば清川雪彦から、経済学者の立場から技術移転の影響に較べ製品改良は間接的な影響しか現れなかつたという認識が出され、それをめぐって、新しい製品の移入の可能性があつたのかどうか、また日本独得の製品の開発については絹中心であり、木綿にはあまり見られなかつたのではないかといった興味深い指摘もなされた。(以下次号)